

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 2 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23520702

研究課題名(和文)大学院教育の国際化にむけて：メンターシップによる院生育成

研究課題名(英文) Towards internationalization of graduate education: Nurturing graduate students via mentorship

研究代表者

坂本 光代 (SAKAMOTO, Mitsuyo)

上智大学・外国語学部・教授

研究者番号：30439335

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：前研究(「北米式TESOLを通して日本の若手研究者を育成する：可能性と課題」(基盤研究(C)、平成19年～22年))では目標事案も達成し、大学院におけるメンターシップ制度の効果を検証すること、またその事について学術論文出版も果たせたが、前研究では英語教授法コースの学生のみを対象としており、後期課程や応用言語学の学生は含まれていなかった。よって本研究では更に門戸を広げ、また新たに応用言語学者でありネイティブ英語話者であるリサ・フェアブラザー准教授を研究メンバーとして迎え入れることで、本制度の更なる充実化を図り、その成果を記録、検証した。

研究成果の概要(英文)：The previous study ("Nurturing young Japanese researchers through North American model of TESOL program: Possibilities and challenges" (Basic Research (C), 2007-2010)) managed to fulfill research objectives, having investigated the effects of a mentorship program in graduate school and published an academic research article, but it only addressed the students in the TESOL program. This time we opened the program to other students, and by inviting a native English speaker Lisa Fairbrother as a new member on the project team, we managed to refine our mentorship program, and we further investigated its effects.

研究分野：応用言語学

キーワード：大学院教育 TESOL メンターシップ 外国語教育 国際化 応用言語学

1. 研究開始当初の背景

平成18年度より、上智大学大学院では北米式TESOL (Teachers of English to Students of Other Languages; 他言語話者に対する英語教授法)プログラムが大学院前期課程より始まった。急速な多様化・国際化に対応し、国際的に活躍出来る外国語教育の専門家並びに日本を代表する国際的応用言語学者の輩出を目的としてこのプログラムが導入され、その効果を研究課題として取り上げる必要性・緊急性があると考え、前研究で検証した。「国際的外国語教育専門家並びに応用言語学者」を育成・輩出するにあたり、メンタリングやワークショップ、学会参加助成などの試みを導入したところ、院生の学びに大きく貢献することが出来た。このことを踏まえ、本研究はTESOLプログラムだけでなく、英語で授業を行っていない応用言語学専攻の大学院生にも門戸を広げ、日本の大学院生の国際化を実践し、その成果を長期に渡って研究、日本国内のみならず海外でも発表するのを目標とした。

2. 研究の目的

本研究では前基盤研究(平成19年度~22年度)と同様、1)大学院生の国内外の学会への参加 2)国際学術誌への投稿の奨励、3)大学院生によるティーチング・リサーチャーとしての学部生への指導制度の導入・充実化、4)研究・就職に関する指導などを図った。

平成19年度から22年度まで、応用言語学者であり上智大学大学院TESOLプログラムにおいて指導に当たっている専任教員4名とTESOL在籍の大学院生13名がメンタリング(mentoring, Smith & Davidson, 1992)を通じ、大学院生と教員による合同論文発表や、大学院生が補助員(Graduate Teacher Researcher(GTR);院生ティーチャー・リサーチャー)として教員の授業参加など、大学院生の学者・研究者としての成長を促して来た経緯がある。上智大学院TESOLプログラムが北米式大学院モデルに基づき、授業は全て英語で行われていることから、TESOLの大学院生は海外学会の参加や英語での論文執筆なども大きな困難を伴わずに成し遂げることができた。また、本プログラムが提供出来るサポートをフルに駆使し、海外の英語話者の院生と同じように学術的活動に精力的に参加することが出来た(Sakamoto & Tamanyu, 2014)。グローバル30に見られるように、日本の教育機関の国際化は急務であることから、英語を得意とする学生のみならず、他の日本人学生の国際育成の糧としても発展させる必要を強く実感し、本研究を実施する運びとなった。

3. 研究の方法

研究者が被験者を観察し、データ分析を行い、まとめる研究が従来の形式であるが、この研究では、ナラティブ法(narrative inquiry, Connelly & Clandinin, 1990)やアクション・リサーチ(action research(実践法), Nunan, 1990; 1992; 佐野, 2000)、アンケートを用いた調査研究などを導入し、被験者自身が積極的に研究に参加出来るセルフスタディ法(Self-study, Loughran et al., 2004)も用いて、教員のみならず、大学院生も含む多数の参加者による多面的なデータ収集を長期に渡って行った。

データとしては、教員5名による定期的なエスノグラフィック的観察(ethnographic observation, Hammersley & Atkinson, 1995)や、TESOLプログラム並びに応用言語学在籍大学院生とのインタビュー、アンケート調査などを4年に渡って実施、分析し、まとめた。メンタリングを受けた学生らには事例研究として、GTRA参加感想文を執筆してもらった。

4. 研究成果

(1)坂本研究室の成果

前科研(課題番号 19520506:北米式TESOLを通して日本の若手研究者を育成する:可能性と課題)に引き続き、院生と共にGraduate Teaching Researcher Assistantship (GTRA)プログラムを介し研究活動に携わった四年間であった。

初年度は準備年ということもあり、当時の修士課程2年生に主に私が専門とする社会文化理論と言語習得についての文献検索、まとめをお願いした。また、出版予定の社会文化理論に関する論文も読んでもらい、フォーマットを手伝ってもらった。こうすることで文献検索から執筆、学術誌に論文提出、と研究に関する一連作業を見てもらえたと思う。

あいにく二年目はサバティカルで在外研究となってしまったため、院生との共同作業は無かったが、前年度に院生がまとめてくれた資料を元に新たに論文を5本完成させることが出来た。また、研究成果をフィンランドとカナダ3カ所にて発表することが出来た。

平成25年度は大学に戻り、新たに私専属のGTRとして当時修士2年の院生と研究を続けることになった。真面目で頼りがいのある学生であり、学部生の頃から教えていたことから問題はないと思っていたが、2年生は就職活動と同時に修論執筆もあることから大変多忙であったため、あまり負担の大きくない作業をと、前年の院生が行った様な知的活動というよりは、海外研究者のアテンドや、私の発表のスライド作成などを手伝ってもらった。実際カナダ

国トロント大学大学院ニナ・スパダ博士を招聘した際は先生に付き添い、修論執筆に関して貴重なアドバイスをもらえた様である。

最終年度の平成 26 年度は、修士課程 2 年生が助手を務めてくれた。大変勤勉で意欲的な青年で、その年開催された国際応用言語学学会で使用したスライドの作成から、論文 3 本のブルーフリーディング及びフォーマットを引き受けてくれ、その内 1 本は査読を通り、既に学術誌に掲載済みであり、残り 2 本も再提出に向けて修正中である。院生は平成 27 年にずれ込んだピクトリア大学ホセイン・ナサジ博士のアテンドも申し出てくれ、4 月 17 日（金）の講演会開催に向けて協力してくれた。

こうして院生らは国際的に活躍する著名な応用言語学者らと交流を持ち、修士/博士論文執筆に向けたアドバイス等を直に受ける機会に恵まれ、勉学意欲を大いに刺激された。本研究教員だけでなく、こうして第一線で活躍する他国の研究者と交流を持つことはメンタリングそして国際化という意味からして重要に思う。

平成 26 年は本研究最終年度でもあり、研究総括として、3 年度毎に開催される国際応用言語学学会 (AILA) に本研究教員 5 名全員でシンポジウム "Accommodating Japanese English Learners" を組み、発表出来た。発表された研究内容は全て本研究の成果である。また、平成 23 年度に GTRA に参加してくれた院生二名も AILA に参加、発表した。

この様に見てみると院生が担ってくれた研究補助のお陰で、自分の研究も随分と捗り、進展した。GTR が書き残してくれたエッセーを読む限り院生らは本プロジェクトに携わることで多くの学びを得たと記してくれているが、明らかに本研究は教員・院生双方にとって大きなプラスであった。

(2) 吉田研究室の成果

日本の英語教育改革の取り組みについて、特に、2011 年に文科省から発表された「国際語としての英語能力向上に関する 5 つの提言と具体的施策」の具体的内容について検証を行った。中でも、大学入試の改革と国際バカロレアや SSH、イマージョン教育などの新しい教育体制について検証を行った。

この 5 年間、日本の英語教育の現状と課題、そしてこれからの展望について院生と研究してきた。英語教育の改善に関する様々な課題を先取りする形で取り組んできた。まず、GTR 一期生藤井里美氏とは Can-do 基準が日本の学習指導要領にどの

程度反映されているかについて研究し (2009)、次に、GTR 2 期生堤 眞幸氏と SELHi 導入によってどのような英語教育の改善がもたらされたかについて研究した (2010)、GTR 3 期生宮崎 秀太氏とは英語教育の目標の変化と教育現場の対応について研究し (2011)、GTR 4 期生日浅彩子氏とは、英語教育の近年の多様化を象徴するイマージョン教育、国際バカロレアプログラム、スーパーサイエンスハイスクールでの取り組みについて研究した (2012)。2013 年度には、GTR 5 期生相馬智子氏と高等学校では英語の授業は基本的に英語で行う、という新学習指導要領の実施状況について研究し、昨年度 (2014) は、小学校の英語の必修化に伴い、日本人外部指導者の重要性に鑑み、その役割等について、GTR 6 期生菅清隆氏と研究した。なお、研究の結果は、毎年、上智大学英語教員研究会の例会で院生を中心に発表し、その成果を現場の教員と共有してきた。院生は、文献調査から実際のデータ収集とその分析に至るまで、様々な形で研究方法等について学ぶことができた。

(3) 渡部研究室の成果

国際学術誌 *Language Assessment Quarterly* (SAGE 出版) に日本における言語テスト・評価の特集号のために執筆者から寄せられた原稿の書式の確認、Web 上で投稿した。

英語教員の指導技能および知識を測定するためのテスト Teacher's Knowledge Test (TKT) の実施、データ分析および研究発表を行った。テストを準備し、解答を回収、統計ソフトへのデータ入力、分析、結果の解釈、受験者への答案と報告書の返却等を行った。

大学院生執筆の学術論文集 *Sophia TESOL Forum* の編集、出版。

CEFR (Common European Framework of Reference) の枠組みにしたがって本学外国語学部の学生 1 年生から 4 年生約 2,000 名を対象に自己評価および外国語習得状況について質問紙による調査。同じ中級レベルでも B1 と B2 のレベルには大きな差があることなどさまざまな意義のある結果が得られた。

本学で実施している CLIL (Content Language Integrated Learning) の語学指導プログラムの効果測定。合計 100 名の受講者から得た、ポートフォリオ、テスト得点、授業評価を分析した。さらに授業観察を行い、指導の状況をまとめた。第三に、外国語教員の技能検定試験の開発である。外国語教員に必要とされる資質は何か、技能はなにかをニーズ分析によって調査し

た。いずれのテーマにおいても、他の教員スタッフ、また助手と討議しながらデータの分析解釈を行った。

(4) 和泉研究室の成果

これから教育者また研究者として育ちゆく上智大学大学院言語学専攻英語教授法コースの大学院生と共に研究と教育活動に従事することによって、彼らの育成と具体的な研究成果を産出することを主な課題として取り組んできた。

院生と共にこれまで行ってきた活動には、順に以下のものが含まれる： 研究内容の具体的な発案と設定、 リサーチ・デザインの考案、 データ収集方法の取り決めと収集手段の具体化、 パイロット研究の履行とその結果に基づくデータ収集方法の修正、 主要データ収集の履行、 収集されたデータの入力、分析、解釈、 研究結果のまとめと論文執筆である。更に、これらの過程で継続して行ってきた活動として、研究テーマの先行研究の探索と読み込みが挙げられる。このように、研究に必要な一連の作業を大学院生と共にこなすことによって、共同研究という形でメンタリングを行ってきた。

本研究課題についてここで具体的に記述する。そのテーマは「英語教員の英語学習体験、ピループ、授業実践、及び英語能力の自信度についての研究」である。この研究の土台となる研究として、まず前回の科学研究費に基づく研究について触れなければならない。この前段階の研究 (Izumi, Shiwaku, & Okuda, 2011) では、大学生の英語学習への考え方、学習方法、及び現在の英語能力への自信度について、質問紙を用いて調べた。学習者ピループと学習方法を分析的学習と体験的学習に分類し、更に学習者の海外経験の有無との関係で比較分析を試みた。その結果、以下の傾向が分かった： (a) 海外経験のある学生はない学生よりも、より体験的学習を重んじる傾向があり、逆に海外経験のない学生はより分析的な学習観を保持していた。 (b) 海外経験のない学生はある学生よりも英語を使うことに不安感や恐怖感を感じるが多く、彼らが海外経験のある学生よりも唯一自信を持っていたのは英文法を説明する能力であった。 (c) 海外経験の有無に関わらず、被験者全体として、分析的学習をより行ってきた学習者は自分の英語能力に対して自信と自己肯定感が低くなる傾向があり、体験的学習方法を使ってきた学習者は自信と自己肯定感が高くなる傾向が見られた。

更に、この研究の追加研究 (Ogawa & Izumi, 2015) として、今度は海外経験のない学習者だけを対象に同様の質問紙を使って調査した。被験者を英語上級レベルと中級レベルの

学習者に分けて分析を試みたところ、以下のことが分かった。

(a) 上級者の方が体験的学習方法を好み、中級者は分析的学習方法を好む傾向があった。 (b) 上級者・中級者とも英語運用能力の自信度はさほど高くはなかったが、特に中級者の自信度は上級者よりも低くなる傾向があった。 (c) 全体として、体験的学習方法は分析的学習方法よりも広範に、またより強く学習者の自信度につながっていることが分かった。

上記の研究結果から、体験的な学習観や学習方法が英語能力と自信度の向上に大きな影響を与えているということが発見された。翻って日本の英語教育の実態を見ると、体験的でコミュニカティブな授業の必要性が叫ばれて久しいが、教育現場ではまだまだ分析的な学習や教育の方が主流であることが多い。そこで、今度は対象を学習者から英語教師に変え、自身学習者であった経験がどのようなものであったのか、それがどういった教師の学習観・教育観と関連しているのか、またそれが教師の英語能力の自信度とどう関係し、更には教師の授業方法にどのように結びついているのかについて調べることとなった。これがこの4年間に渡る研究課題の中心となるものである。

データ収集は2012年と2013年の夏に開催された上智大学教員免許更新講習に参加した英語教師を対象に行われた。データ収集後は全てのデータをエクセル及びSPSSに入力し、それを基にリサーチ・クwestionに答えるべく、様々な角度から量的な分析が試みられてきた。現在はこういった分析もようやく一段落終え、論文の本格的な執筆に取り掛かっているところである。調査結果を簡単にまとめると、以下のようになる： (a) 分析的学習と体験的学習経験の頻度は、海外経験がある教師にはその差が見られなかったが、海外経験がない教師は分析的学習経験の方をより多く持っていた。 (b) ピループにおいては、海外経験の有無による差は見られなかったが、両者とも分析的学習よりも体験的学習に対してより強いピループを持っていた。 (c) 分析的な教育方法では、海外経験の有無による差は見られなかったが、体験的な教育方法は、海外経験のある教師の方がいない教師よりも頻繁に行っていた。 (d) 英語能力の自信度は、海外経験がある教師の方がいない教師よりも高くなる傾向性があった。 (e) 学習経験と教育方法の間で相関関係が認められた。とりわけ、分析的学習経験が多い教師は分析的な教育方法を、体験的な学習経験が多い教師は体験的な教育方法を用いる傾向があった。 (f) ピループと教育方法の間で相関関係が認められた。とりわけ、分析的学習に対するピループを強く持つ教師は分析的な教育方

法を、体験的学習に対するピリーフを強く持つ教師は体験的な教育方法をより行う傾向があった。

(g) 英語学習体験と英語能力の自信度との間に相関関係が見られた。特に、体験的学習はより高い自信度につながっていた。(h)英語能力に対する自信度と教育方法の間に相関関係が見られた。とりわけ、体験的教育を行う教師は英語運用能力の自信度が高く、一方、分析的教育を行う教師は英語運用能力の自信度が低い傾向が見られた。

これらの結果は学習者に焦点を当てて調べられた先行研究の結果とも一致する点が多く、教師自身の学習者経験、及びそこで培われたピリーフや自信度が、いかに教師の教育実践に関わっているかということを示している。これらの結果から得られる日本の英語教育に対する示唆は多く、重要である。今後、教員養成カリキュラムや教員研修事業などに有効に活かされていかなければならない課題である。

この4年間の院生との共同研究を通して一連の研究過程を共に体験することができたことは、具体的な研究成果という意味でも将来を担う人材を育成するという意味でも、とても有意義な時間をもてたと思う。これまでの試みを糧として、これからも継続して、実践的な形で院生のメンタリングを行っていきたいと考えている。

(5) フェアブラザー研究室の成果

My main research area is micro-level language management (Jernudd & Neustupný, 1987; Nekvapil, 2009) in intercultural interactions and during the four years of this project I have focused on two areas: the interactions of plurilingual speakers in the Japanese workplace and the interactions of Japanese students whilst studying abroad. Working with a GTRA has not only enabled me to further these projects, but has also provided me with a very useful opportunity to reflect on my own research processes and practices.

During the first year of the project I was on sabbatical but I used that time to conduct a number of interviews with plurilingual employees at workplaces in Japan and Japanese students studying in the UK and Australia. Unfortunately in 2012 I was not assigned a GTRA but I was able to make considerable progress on the transcription and analysis of my interview data, enabling me to give one presentation at the Sociolinguistics Symposium in Berlin and another at the Japanese Society for Language Management in Chiba, based on my preliminary findings.

In 2013, I had my first GTRA and, as this was also her first year in the Masters programme, I tried to give her tasks to help her

develop her own research skills whilst also getting a better understanding of the research process from the preliminary research question to literature review and data collection, and finally to the presentation and publication of findings. Her first task was to help prepare the literature review for a presentation on language management in the workplace that I gave at the International Symposium on Bilingualism held in Singapore. This task helped her to hone both her literature search skills and also her 'reading to write' skills. Rather than just reading randomly and making general notes, I gave her a list of questions to help her look for conceptual differences in different authors' work and pick out examples that would be useful to illustrate certain points. In addition, she gave her GTRA workshop on 'How to write a literature review' and by researching this topic she was able to better understand the purpose and organization of a good literature review as well as understand the concept of 'reading to write', which she was later able to apply in her own MA research.

Another skill that I tried to help my GTR with was the coding and analysis of interview data. I helped her to use the NVivo programme in order to prepare for my presentation at the Third Language Management Symposium held in Prague. She was able to apply the skills she learned here later in the coding and analysis of her own interview data for her MA thesis. In addition, we wrote a Japanese journal article together based on my data and I asked my GTR to help with the formatting and bibliography checks of the other papers I wrote during that period. All these activities were good practise for her for when she came to conduct her own research and write her own academic articles. She also came to my undergraduate seminar at least once a semester to present her own research and comment on the undergraduates' research, which helped her to gain confidence in presenting her own research findings in the MA presentation sessions and later at academic conferences. Academic networking is also a necessary skill for researchers and my GTR also helped with the organization of the visits of the two invited guest speakers.

In 2014 another student became my GTR. Because she did not have a strong sociolinguistics background, in addition to generally learning about the process of research, part of my work with my GTR focused on helping her understand the basics of sociolinguistics theory and research. Therefore, during the first semester, one of her main duties was to attend my undergraduate sociolinguistics seminar and help facilitate the student discussions after each reading. Through this process she was able to quickly

grasp some of the key concepts in order to be able to help me prepare for my presentation at AILA. My GTR helped with my NVivo coding, literature review and bibliography, and also the preparation of my slides.

In the second semester, we worked together on the review of a book linking sociolinguistics and second language acquisition, which will hopefully be published in the coming year. In addition to improving her knowledge in this area, preparing the book review was a good way for her to consider her own approach to reading, and in particular to develop an awareness of not only what is included in a publication but also which issues are missing. We also spent time focusing on the mechanics and process of academic paper writing. My GTR knew that she had been having difficulties with referencing so to improve her skills in this area she conducted a workshop with another GTR on the APA referencing system. In addition, she helped with the referencing, formatting and proofreading for a book chapter, currently under review on English use in European multinationals based in Japan, and the formatting for a journal article on multiform language practices in the Japanese workplace.

The four years of this project have been a valuable opportunity to develop both my own research and also successfully mentor my two GTRs to improve their research skills. As an additional benefit, the process of mentoring has enabled me to fine tune my *own* awareness and articulation of the research process so that I now feel I can guide students more effectively and systematically.

5. 主な発表論文等

【雑誌論文】(計 48 件)

- (1) Sakamoto, M. & Tamanyu, L. (2014). Mentorship in a Japanese graduate school: Learning through apprenticeship. *International Journal of Mentoring and Coaching in Education* 3(1), pp. 32-50. (査読有)
- (2) Watanabe, Y. (2013). Profiling lexical features of teacher talk in CLIL courses: The case of an EAP programme at higher education in Japan. *International CLIL Research Journal* 2(1), pp. 4-18. (査読有)
- (3) Hanaoka, O. & Izumi, S. (2012). Noticing and uptake: Addressing pre-articulated cover problems in L2 writing. *Journal of Second Language Writing*, 21, pp. 332-347. (査読有)
- (4) Fairbrother, L. & Masuda, Y. (2012). Simple management in contact situations: What factors determine whether a deviation will be noted or not?. *Journal of Asian Pacific Communication* 22(2), pp. 213-231. (査読有)

【学会発表】(計 155 件)

- (1) Yoshida, K., Watanabe, Y., Izumi, S., Fairbrother, L. & Sakamoto, M. (2014). Accommodating Japanese Learners Symposium. AILA 2014, August 12, 2014, Brisbane (Australia).

【図書】(計 24 件)

- (1) Fairbrother, L. (2015). *Language Management in the Japanese Workplace*. In W. Davies & E. Ziegler (Eds.) *Microlinguistics and Language Planning*. Palgrave Macmillan, 239(186-203).
- (2) 吉田研作他(2014). *Junior Progressive English-Japanese/Japanese-English Dictionary*. 東京：小学館, 1408.
- (3) 和泉伸一(2014). 『コミュニケーション型な英語教育を考える：日本の教育現場に役立つ理論と実践』「フォーカス・オン・フォーム」上智大学 CLT プロジェクト(編). 東京：アルク, 200(108-111).
- (4) 渡部良典(2012). *CLIL(内容言語統一型学習): 上智大学外国語教育の新たな挑戦--第2巻 実践と応用「シラバスの作成とプログラム評価: 設計からニーズ分析、効果の測定まで」*. 東京：上智大学出版, 280.

【産業財産権】

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

【その他】

ホームページ等 なし

6. 研究組織

- (1) 研究代表者
坂本 光代 (SAKAMOTO, Mitsuyo)
上智大学・外国語学部・教授
研究者番号：30439335
- (2) 研究分担者
吉田 研作 (YOSHIDA, Kensaku)
上智大学・言語教育センター・教授
研究者番号：80053718
渡部 良典 (WATANABE, Yoshinori)
上智大学・外国語学研究所・教授
研究者番号：20167183
和泉 伸一 (IZUMI, Shinichi)
上智大学・外国語学部・教授
研究者番号：10327877
フェアブラザー・リサ
(FAIRBROTHER, Lisa)
上智大学・外国語学部・准教授
研究者番号：10365687
- (3) 連携研究者
なし